

川田よしこ 様
愛用ミシン:N265

ミシンはタイムマシン

「よしこさん、洋裁でも習いに行ったらどう？」

結婚して 2 ヶ月、同居している義母が私に言う。夫は朝早く出かけ、夜遅く帰ってくる仕事だった。義母は多趣味で毎日のように出かけ外食も多かった。知らない土地で友達もいない私は日々時間を持て余していた。そんな“嫁”を見かねて言ったのだろう。


「武蔵小金井駅の側にジャノメミシンの工場があるけど洋裁教室もあるそうよ、立派なミシンがあるのだから使わないともったいないわよ。よしこさん！」

確かに、嫁入り道具に最新式のジャノメミシンを持ってきた。当時ミシンは高級品だった。実家の母が“晴れの日”に備えて毎月せつせと掛け金をしていた愛情深いミシンだ。

「ブラウスカスカートを作って母に感謝の気持ちを伝えよう」

私はジャノメミシンの工場内にある洋裁教室に週 1 回通うことにした。昭和 52、3 年のころだった。

大手スーパーの前からバスに乗り、木々に覆われたゴルフ場や金魚の養殖場を右に見ながら小金井街道を真っすぐ下っていくと、10 分足らずで終点の武蔵小金井駅に着く。踏切を渡り 5 分ほど商店街を歩くと、壮大な敷地の中にジャノメミシン工場があった。何棟もある建物の内の 1 棟の端の部屋で、先生と生徒 5 人の家庭的な雰囲気洋裁教室だった。



大学受験中心だった高校時代、家庭科の時間にエプロンしか縫ったことのない私だった。おまけに糸掛けさえも下手で友達に手伝ってもらったことを思い出す。

そんな私に先生はハترون紙に製図を書くことから教えてくださった。

「この時が一番出来上がりを想像して楽しいのよ」

しかし、私はそれどころでは無かった。大きな三角定規をあちらこちらと動き廻し、線を引いては消しゴムで消すことを繰り返すので、今にも紙が破れそうだった。1枚のスカートを作るためになんと様々な作業があるのかと、身に染みて知った。

何より良かったのはここでは1人1台のミシンを使用できることだった。高校では3人に1台のミシンの割り当てだったので、使う度ごとに上糸やボビンケースを取り換えないとイケなかった。似たような経験をしてきた主婦もいて昼休みにお弁当を食べながら、

「さすが製造元ね」

と、笑いながらお喋りをした。

生まれて初めてミシンで、ボタンホールをした時はその正確な針の動きに、かがり縫いをした時はそのスピードに感嘆した。

「ミシンってすごい！」

4ヶ月ほどかけて義母にスカートを、母に半袖の先にシャーリングをしたスモックを作りプレゼントした。母は不器用な私が作ったことに驚いたが、同時に嫁ぎ先で仲良く暮らしていると安心したようだった。

ある日近所の奥さんが立ち話で教えてくれた。

「お宅のお義母さんが『うちのお嫁さん、私にスカートをこしらえてくれたのよ』っていうから、美容院にいたお客さん、みんな言っていたわよ。『いいお嫁さんね。羨ましいわ！！』」



素直に言います。

「お義母さま、洋裁ってはっきり言って最初はめんどくさいと思っていました。でもそんなにも喜んでくださっているなんて…胸が痛みました。手作りっていいですね。お義母さまありがとうございます」


その後子供が生まれ洋裁教室はやめた。そしてミシンは押し入れの奥にしまい込んでしまった。再びミシンが日の目を見るのは子供が幼稚園に通い始めるころだった。気が付くと足踏みミシンはほとんどの家庭から消えていて、電気ミシンが中心の時代になっていた。

子供の幼稚園では上履き入れや体操着入れは親の手作りだった。どれもサイズが決められていたので、その通りに作らなくてはならない。その上、母親たちは刺しゅうをしたりアップリケをつけたりと可愛く見えるように色々と工夫を凝らしていた。洋裁教室で習った“腕”とミシンの刺しゅう機能のお陰であれこれと楽しみながら作ることができた。ネーム刺しゅうはもちろん、リンゴやサクランボの刺しゅうも上出来だった。

お遊戯会の衣装やピアノの発表会のロングワンピースも縫い上げた。振り返ると、このころが一番子育ての楽しい時期であり、ミシンを活用した時かもしれない。

“いい歳”になった今は、ダイニングルームが私の洋裁教室だ。2代目のミシンをテーブルの上に置いて自由に使っている。クッションカバーやランチオンマット等小物作りがメインだ。

「タタタ…」と縫いあがっていく音を聞いていると過ぎ去った洋裁教室の思い出や、幼かった子供の顔、母や義母の顔が浮かんでくる。まるで無声映画のフィルムみたいに、忙しく過ぎ去った日々。今の私にとってミシンは過去と現在をつなぐタイムマシンかもしれない。



娘が巣立っていく時には母が私に贈ってくれたようにミシンを是非贈りたいと思う。母はどのような想いでミシンを嫁入り道具に入れてくれたのだろうか…。多分今の私と同じ気持ちだったと思う。

「心豊かに暮らしてね。誰かの為でもいいし、自分の為でもいいから、洋裁の時間を楽しんでほしい」と。